W-2-1　グロス実践における問題点とその背景にある言語観

浅岡健志朗　石塚政行　松田俊介

1. 言語分析としてのグロス実践

言語研究において、例文の提示は言語現象を分析するという目的のための手段として機能するものである。一方で、例文の提示は、それ自身が言語現象の分析でもある。

(1)	Včera	jsem	konečně	proda-l	aut-o.	（例文）
	yesterday	AUX.1SG	at.last	sell-PST.SG.M	car-ACC.SG	（グロス）
	「昨日私はとうとう車を売った」					（訳文）

The Leipzig Glossing Rules によると、グロスは、例文を構成する語や語の部分がもつ意味と文法機能に関する情報を表示するものである。グロスを用いた表示は典型的に三行の部分から構成される。一行目に提示されるのが例文である。ここでは、対象の文がどのような要素に分割されるかについての分析が示される。例文は語に分析され、語と語の境界が空白によって示される。場合によっては語が形態素などの下位の要素にさらに分析され、それらの境界はハイフンによって示される[1]。こうして取り出された各要素が持つ意味と文法機能についての分析が示されるのが二行目のグロスである。取り出された語または語を構成する部分に対して、それが内容的要素であれば自然言語による訳を、機能的要素であれば略号を付す。三行目に訳文として提示されるのが、対象の文が全体として持つ意味についての分析である。ここには、自然言語による意訳が与えられる。lit.という表示とともにいわゆる直訳が示されることもある。

このように、グロスを用いた例文の提示は言語現象に対する分析の提示である。分析の成否は、当然ながら分析に用いる手法に依存する。2節と3節では、グロスを用いた例文の提示という言語研究における慣習的な分析手法を用いた際に生じる実践上の問題を例示し、続く4節でそれらの問題がグロス実践の前提とする言語観に端を発するものであると論じる。

2. 曖昧性が解消できない多義語

まず取り上げるのは、同一の発話において、多義語の複数の意義のどれが関わっているか決めがたい場合に、そのグロスをどのように振るかという問題である。たとえば、バスク語の動詞ibiliは多義語であり、①《歩いて移動する》と②（様態の指定のない）《移動する》の少なくとも2つの意義を持つ。①《歩いて移動する》の意義を立てる根拠は、(2)のように他の移動動詞とともに用いられてその移動の様態を指定する用法が見られることである。(2)は、走ったりスキップしたりするのではなく、徒歩で移動した、という意味を表す。

[1] The Leipzig Glossing Rules は、形態素ごとにグロスを付す際の慣習（conventions for interlinear morpheme-by-morpheme glosses）を整理したものである。しかし実践的には、必ずしも分析可能な形態素がすべて分析された上で示されるわけではない。複数の形態素からなると分析できる複合的な単位を分析せずに示し、その複合的な単位にグロスを付すことは一般的である。例えば、複合語を構成する語根にそれぞれ訳が与えられるわけでは必ずしもない。語をどの程度分析して示すかは、議論の目的と想定される読者の知識に依存する。

(2) Ibili-z bizikleta-raino joan da.
walk-INS bicycle-TERM go.PFV PRS
「彼女は自転車のところまで歩いて行った」

いっぽう、(3)のように様態副詞とともに用いられた例からは、様態指定のない②《移動する》の意義が立てられる。dabila は ibili の現在形である。

(3) Eneko lasterka da-bila.
Eneko running PRS-move
「エネコは走っている」

このように、動詞ibiliにおける《歩いて》という様態の指定が存在する場合としない場合があることは明らかである。しかし、どちらの意義が関わっているか決めがたい場合もある。それは、ibili が主動詞となって、徒歩による移動を表すために用いられている例である(4)。

(4) En-e lagun=a ikus-i du-t bide-an ibil-tze-n.
1 SG-GEN friend=SG see-PFV PRS-E1S path-LOC ?-GER-LOC
「私は友人が道を歩いているのを見た」

この発話は、友人とされる人物が道を歩いている様子を見て発話されたものである。その点から言えば、①《歩いて移動する》の意義が関わっているように見える。いっぽうで、この人物が走っていた文脈においても同じ文を発することが可能である。このことからは、(4)の発話でも、様態の指定のない②《移動する》が用いられており、《歩いて》というのは語用論的な推論によるものと考えることもできなくはない。さらに理論的な可能性を検討すれば、①と②の両方の意義が活性化されているということもありうる。しかし、このような場合であっても、グロスの原則は walk か move のどちらかを(4)の ibil に振ることを要求するのである。

同様の事例はさらに増やすことができる。たとえば、バスク語の動詞 eman には、①《与える》と②《移動させる》の2つの意義を立てることができる。①の例は etxe=a eman [house=SG give]「家を与える」であり、対象の位置変化を伴わない所有権の移動を表す。②の例は baloi=a sare=a-ren barne-an eman [ball=SG net=SG-GEN inside-LOC put]「ボールをネットに入れる」であり、所有権の移動を伴わない対象の位置変化を表す。ここで、所有権の移動と位置変化が同時に生じているような授与事象（本を与えるために手渡す）を、eman を用いて表現することを考えてみよう。liburu=a eman [book=SG give]「本をあげる」は、①と②のどちらの意義を利用した表現なのだろうか。この例においてもまた、分析者は eman に give と put のどちらのグロスを付すかという問題に直面することになる。

3. 語よりも大きな単位

次に、語よりも大きな単位によって表現される情報の表示をめぐる問題を取り上げる。チェコ語の

過去時制では、(5)-(6)のように、太字で示す助動詞によって主語の人称と数が表現される[2]。

(5) Včera **jsem** konečně proda-l aut-o.
yesterday AUX.1SG at.last sell-PST.SG.M car-ACC.SG
「昨日、私はとうとう車を売った」

(6) Včera **jsi** konečně proda-l aut-o.
yesterday AUX.2SG at.last sell-PST.SG.M car-ACC.SG
「昨日、君はとうとう車を売った」

(7) Včera konečně proda-l aut-o.
yesterday at.last sell-PST.SG.M car-ACC.SG
「昨日、彼はとうとう車を売った」

一方で、(7)には助動詞が現れておらず、他に主語の人称を示す要素もない。しかし、訳文に示されているように、この文の主語は三人称である。ここで主語の人称の情報は文中の特定の要素が担うものではなく、節中に当の助動詞が不在であることによって表現されている。

グロスは、例文を構成する語ないし語の部分が持つ意味または文法機能を表示するものであるため、(7)において節全体のあり方によって表現される主語の人称のように、語よりも大きな単位によって表現される情報の表示には適さない。慣習的なグロス実践の方法から大きく逸脱せずにこれを表示しようとするならば、分析者が取りうる選択肢は、次に挙げるようなものになるだろう。まず、主語の人称を表示しないという選択肢がある。文から取り出される語以下の大きさの要素が持つ意味や文法機能を表示するという方針を維持するのであれば、人称の情報を担う要素がない以上、この選択肢を取らざるを得ない。しかし、主語の人称が表現されているという点で(5)-(6)と(7)は同様であるにも関わらず、(7)でのみこの情報を表示することができない仕組みは不備と言える。別の選択肢として、主語の人称を(7)を構成するいずれかの要素、例えば動詞に帰属させて表示するという方法も考えられる。しかしこの方法では、(5)-(7)の動詞がどれも同じ語形であるにも関わらず、(7)にのみ人称が表示されることになり、表示の一貫性が損なわれる。一貫性を保つために(5)-(6)の動詞にも人称を表示したとしても、やはり同じ語形の動詞が(5)-(7)でそれぞれ異なる人称を表現することになるという問題が生じる。

以上のように、慣習的なグロス実践の方法は、語よりも大きな単位が担う情報の表示には適さない。このことは、イディオムにグロスを振る際にも当てはまる。

(8) *Už* ***se*** *tímto* *problém-em* ***zabýv-ám***.
already ? this.SG.INS problem-SG.INS ?-PRS.1SG
「私はすでにこの問題に取り組んでいます」

(8)において、太字で示す２つの語は全体として「取り組む」に相当する意味を表現するイディオムと見ることができる。zabývám と se は異なる語であるため、それぞれに対してグロスを与えることが求められるが、その際にどちらの語に関しても問題が生じる。まず、zabývám は se を伴わずに生じること

[2] 主語名詞句（一人称と二人称では人称代名詞、三人称では人称代名詞または語彙的名詞句）が明示的に現れることもある。(1)-(3)のように主語名詞句がない場合、主語の人称は上記の助動詞（の不在）のみによって表現される。

のない語、つまり、クランベリーワード (Taylor 2012: 71) である。単独で現れることのない語の単独での意味を表示することは可能だろうか。仮に可能だとするならば、それはイディオムの意味から当の語以外の要素の意味を「差し引く」ことによって推定されるほかない[3]。ここで問題となるのは、全体から「差し引く」べき se の意味である。この語は形式としては再帰代名詞の対格形だが、当のイディオムの意味の中に再帰や対格の貢献を見出すことは困難であり、この語のこの環境における単独での意味は取り出し難い。それゆえ zabývám 単独の意味もまた取り出し難いということになる。また、se に対してグロスを付す際にも困難が生じる。(8)のようにこの要素に再帰と対格のグロスを振ることは上記の理由で妥当とは言い難く、かと言って何のグロスも付さなければ意味不明の要素が残された表示となってしまう。以上は、構成要素が全体の意味に対してどのような貢献を果たしているのかが不明確なイディオム、すなわち分析可能性 (Langacker 2008: 61) の低いイディオム一般に当てはまる問題と言える。

4. ブロックの比喩

以上、慣習的なグロス実践において生じる問題を例示した。本節では、これらの問題が生じる原因を、グロス実践の背景にある言語観との関連の下で検討する。

(9) a. 文脈が定まってもなお複数の異なる解釈が可能な多義語のグロスをどのように表示するか。
b. 語よりも大きな単位によって表現される情報をどのように表示するか。

一節で確認したように、グロスを用いた例文の提示は、言語現象の分析である。そして分析は、ある対象に対して、何らかの理論を前提にしつつ、分析者が行うものであるため、分析に問題が生じる場合、その原因は対象・理論・分析者という三者とそれらの関係の中にあると考えられる。このことから、分析が不首尾となる要因として、次の三つを想定できる。すなわち、(i)分析の前提となっている理論の内部に矛盾があること、(ii)分析の前提となっている理論と分析の対象の実際のあり方とが食い違っていること、(iii)分析者が理論の運用に際して誤りを犯していることである。

では、グロスによる分析は、どのような理論を前提としてなされているか。上述の問題が生じるようなグロス実践は、少なくとも次のような想定に立つものと言える。

(10) a. 文は、離散的な要素に余すことなく分析可能である。
b. 分析された要素は、それぞれ明確な意味または文法機能を持つ。
c. 文を構成する要素は、異なる文脈に現れても常に同一のものである。（定常性の想定）
d. 文全体の意味は、それを構成する要素のみから導かれる。（合成性の想定）

まず、例文を空白とハイフンで区切る表示は、(10a)の想定に基づくものである。文は少なくとも語という離散的要素に分析可能であり、場合によってはさらに下位の離散的要素に分析可能であると想定される。第二に、グロスの表示は、分析された諸要素に明確な意味または文法機能を与えることを要求するもの、すなわち(10b)を前提とするものである。特に内容的要素の場合には、単一の明確な意味を表示することが求められる。第三に、形式が共通する要素に対して同じグロスを付すことが求めら

[3] この仕方で、例えば「筆舌に尽くしがたい」の「筆舌」が「書いたり述べたりすること」を意味すると主張することは（妥当であるかはともかく）可能だろう。

れる場合、これは(10c)の想定に立つものである。例えば、(8)における se に対して再帰と対格のグロスを付すならば、それはこの要素が明確に再帰と対格の機能を持つ別の文脈における se と同一のものであるという想定に基づくものである。最後に、(7)において人称の表示が問題となるのは、文全体が持つ三人称という意味をいずれかの要素に振り分けることが可能であるという想定に立っているためである。文全体が持つ意味を各要素に振り分けて表示することが可能であるというこの想定は、(10d)の想定から導かれるものである。

これら(10a-d)の想定は、文を離散的かつ定常的な部分の組み合わせによって成立するものとする捉え方である。言語記号に対するこのような見方は、ブロックの比喩と呼ばれる(Langacker 1987: §12.1.2, Langacker 2019: 348)。慣習的なグロス実践は、ブロックの比喩に基づいた言語観のもとでなされるものと言える。

(10a-d)の想定が相互に矛盾する点は見当たらない。それゆえ、分析者の誤りという要因を除外するなら、グロスによる分析が不首尾となる原因として最も確からしいのは、ブロックの比喩が想定する言語のあり方と、分析対象である言語現象の実際のあり方とが食い違っていることとなる。とすれば、(9a)の問題が生じるのは、(10b)と(10c)の想定と、文脈が定まってもなお複数の異なる解釈が可能な場合がある、という言語現象のあり方に食い違いがあるためであり、そして、(9b)の問題が生じるのは、(10d)の想定と、語よりも大きな単位によって表現される情報がある、という言語現象のあり方が食い違っているためと言える。

以上、言語の実態と相容れない部分があるにも関わらず、ブロックの比喩がグロスという分析方法の暗黙の前提となっていることを確認した。この比喩が言語分析の慣習的な方法における暗黙の前提となっていることは、ブロックの比喩に基づいて事物を捉えるという、人間に備わる性向の一つの現れと見ることができるだろう（第4発表）。この性向は、音声言語のグロスを用いた分析だけに見られる限定的なものではない。以下では、視覚言語である日本手話の分析に見られるブロックの比喩の影響を検討する。

日本手話研究では、ラベルという表記法を用いて語を記述する ((11)(12))。ラベルが使用される理由として、日本手話には実用に耐える書記方法がないことが挙げられる。これに対する次善の策として、語と一対一に対応するラベルによって、正確に語を表示する（ことを目指した）システムが提唱されている[4]。

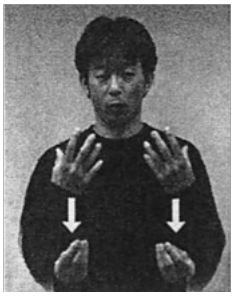
(11)　/昨日　田中　来る/
「昨日、田中が来た」　（松岡 2019: 353）

(12)　/私　名前　黒田　いう/
「私の名前は黒田です」　（高嶋ほか 2018: 225）

ラベルが語と一対一に対応するということから、「同一ラベルが振られた対象は同一語である」という原則が導かれる。この原則が大きな問題を引き起こす。例えば、市田 (2005b: 89) は「/終わる/ の助

[4] 本ワークショップではラベルは一律 “/　/” で表記する。

動詞的用法には、[…] 「〜するに違いない」という用法がある」と述べる。ここにおいて市田は、「物事が終わる」という意味を表す語と「〜するに違いない」という意味を表す語は /終わる/ という同一ラベルが付される同一語である、言い換えれば多義語であると（無意識のうちに）表明していることになる。しかし、多義語と見なされるためには少なくとも「物事が終わる」という意味と「〜するに違いない」という意味が何らかの点で関連していなければならない。もし関連がなければ、多義語ではなく同音異義語であることになる。したがって、議論も無しに、多義語であると認定するのは問題であろう。



（市田 2005a: 96）

同様の問題は、イディオムの扱いにも当てはまる。岡・赤堀 (2011: 39) は 「/鼻＋高い/ と言えば、嗅覚がするどい人のことです。[…] /舌＋高い/ は味覚が優れていること […] を指します」と述べている。このラベル貼付法から、「Xの感覚が鋭敏だ」という意味を表すイディオム /X＋高い/ に表れる /高い/ は、「高価だ」という意味を表す語と同一であると岡・赤堀が（無意識のうちに）表明していることが読み取れる。しかし、「高価だ」という意味を表す語と「（感覚が）鋭敏だ」という意味を表す語が同音異義語である可能性も、上の市田の例と同様に捨てきれない。

（岡・赤堀 2011: 93）

ここで、「物事が終わる」と「〜するに違いない」に、また「高価だ」と「鋭敏だ」に関連が現にあるかどうかが問題なのではないことに注意されたい。ラベルと語を一対一に対応させるという方略によって、分析者が無意識のうちに自身の言語観を分析に反映させてしまうことが問題なのである。

以上の問題は、異なる環境に現れる形式を分析者が暗黙のうちに同一の語として捉えることによって生じたものである。これもまた、ブロックの比喩、特に定常性の想定に基づいて事物を捉えようとする人間の性向が現れた事例であると言える。音声言語におけるグロスの実践であれ、視覚言語におけるラベルの実践であれ、分析者の見方に暗黙のレベルで影響を与えているのがブロックの比喩なのである。

略号一覧　E1S: 能格が一人称単数である, TERM: terminative（到格）

参考文献　市田泰弘 (2005a)「手話の言語学: 二つの世界のはざまで」『言語』34 (3): 90–99. / 市田泰弘 (2005b)「手話の言語学: 文法化」『言語』34 (11): 88–96. / 岡典栄・赤堀仁美 (2011)『文法が基礎からわかる　日本手話のしくみ』大修館書店. / 高嶋由布子・黒田栄光・シャーマン ウィルコックス (2018)「日本手話の「いう」の拡張：証拠性と習慣性・一般性への経路」『日本言語学会156回大会予稿集』: 223–228. / 松岡和美 (2019)「日本手話における時制と連動した非手指アスペクトマーカーの予備的研究」『第158回日本言語学会大会予稿集』: 353–358. / Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press. / Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in Cognitive Grammar. in Audring and Masini (eds.) *The Oxford Handbook of Morphological Theory*. 346–364.